

高橋順子の詩について

江口 節

高橋順子の著作は詩集十三冊、他、連詩集、選詩集、句集、小説、エッセイ、写真付き著作、評論、翻訳、詩を中心に正に文学で生活してきた人です。

古里は、千葉県九十九里浜東の端、銚子の隣町、飯岡町の履物店に生まれました。海辺から家数にして三軒め、海辺の景色は荒涼、としていたそうです。二〇一一年の東北大震災の時には、6歳の津波に前方の一家は流され、海が直接見える状況でしたが、幸いなことに実家は半壊で済んだそうです。

東京大学仏文科を出た後は、出版社(河出書房新社、青土社)に勤め、自己都合で退社(1986)します。一人出版社書肆といを営みながら、編集や校正、自分の原稿などで細々と暮らしていくわけですが、無論、生活の成り立つてあるわけではなく、覚悟の転身でした。

まず、第一、第二詩集から詩を読んでもみます。会社員時代のもので、先年亡くなった書肆山田の編集者大泉史世さんは、同じ仏文科の同級生、盟友でもあり、当時彼女が勤めていた出版社から出します。しかし第一詩集は、完成直後に出版社がつぶれたため、差し押さえられた中から半分150冊だけ受け取れたそうです。

「海まで」より 星の軋み オレンジとレモン りんごのようなころ

非常に繊細で、壊れやすい感覚ですね。このような、閉鎖的ともいえる純粋な感覚を自覚するところから、誰もが詩の世界に入る、とも言えます。

高橋順子は、小学校二年生の時、担任からもらった絵本『人魚姫』に深くはまっています。皆さんご存じのように、恋する王子に何も言えないまま最後に人魚姫は泡になってしまふ、光と水のイメージが美しい悲劇です。これが、高橋さんにとって人生の初めに触れた詩というもの、人生を見つめる眼にもなりました。子どものころ、「夢見がちなところはあったが、作文は不得手で、文字を書くようになる」と気持ち閉ざされ。無邪気さを失った。文学少女の時期はなく、詩を書くようになったのは、二十歳を過ぎてからだ。「エッセー」「人魚好き」(一九九四年)詩を書き始めたのは、少女時代にこの作品とであつたことと無関係とは思えない、そうです。

総じて、高橋順子の詩は平明で、子どものようなまっさらな純な感覚から生まれる機知があり、詩集の初めに短詩を連ねる構成を時々入れます。現代詩女流賞『花まいらせず』では、「四行詩の植木鉢」と題して十篇、花椿賞『幸福な葉っぱ』では「四行詩の道草」三十篇、次の『普通の女』には「四行詩の風景」九編、三好達治賞『海へ』には「三行詩のゆめ」十一篇、といった具合ですが、これらの短詩は、ふつふつと湧いて来る詩想のスケッチといった趣で、ひそかなユーモアもあり、全体に上品です。自分に距離をおいて眺められる人ではないでしょうか。暗くもなくウエットでもないけれど、一人の世界が支配的。比喩が主体です。

「風」より 鳥 詩

大岡信は『風』の葉文に、「自分が痛みを感じる事が、そのまま、自分こそその痛みの原因にほかならないのではないかと感じるのと同じである心のありかた、これが高橋順子の詩を特徴づけている。」と、書く。「静かな孤独の雰囲気支配的である」とも書き、ここからはみ出してゆくとどうなるのだろう、という好奇心がこのとき大岡信にはありました。この視点は、その後の高橋順子を見る時、非常に示唆に富んでいますね

高橋は、車谷長吉と出会って、詩風が大きく変化していきます。二人が出会うきっかけは、高橋順子

の詩でした。

車谷長吉は、知り合いの事務所で待ち時間に、古雑誌に載っていた高橋順子の詩を読んで感銘を受けます。知り合いに「この詩、いいねえ」とでもいったのでしようか。知り合いは、偶然にも高橋順子の青土社の元同僚で、車谷に高橋の詩集三冊を貸してくれました。そして車谷は、毎月一枚、全部で十一枚の絵手紙を一方的に高橋に送ります。そのきっかけになった詩です。

『幸福な葉っぱ』より **木肌がすこしあたたかいとき**

これは、恋の詩として「マリー・クレール」という雑誌に掲載されたのですが、恋愛のあまやかさとは無縁、むしろ恋するゆえの孤独感が際立ちます。そして恋人たちは結局別れます。車谷は、そこにひかれたようです。この詩を所収した『幸福な葉っぱ』が現代詩花椿賞を受賞して、車谷は贈賞式に招待されますが、あいさつすることなく帰っていますので、高橋さんはどんな人か分からずじまいでした。その年の暮れ、車谷がお祝いの品を差し上げたいと言って、近くの喫茶店で会って初めて言葉を交わしますが、車谷は無口で、ほとんど話らしい話になりませんでした。

高橋が会社を辞めて覚悟の生活をしていたように、このころ、車谷も一旦やめた小説に再度賭ける決意で上京したのに行き詰まって、「死んだも同然」「もう小説原稿は書けないと思って」いたのです。

高橋から作品を読ませてほしいと言われ、車谷は15・6年前に「新潮」に載った作品のコピーを渡します。その「生と死のないまざった緊密な文体」に高橋は感嘆し、車谷に伝える。そこから、車谷に生がよみがえり、長く書こうとして書けなかった『鹽壺の匙』が完成します。これは芥川賞候補にはなりませんでしたが、芸術選奨文部大臣新人賞と三島由紀夫賞を受賞します。

文学に賭ける者同士の呼吸、でしょうか。

二人を結び付けた詩は、詩集では車谷が読んだ初出の第四連が削除されていました。そこがもつとも気に入っていた車谷が「なぜ削ったのか」と問うと、「詮索されたくなかったから」と高橋はこたえます。のちに高橋は、車谷は心の中で、弱い、とつぶやいたことだろうと、回想するのですが、こうして高橋順子も、純粹詩の典型のような次元から、命を見据え命を支える芸術の次元へと、変貌を遂げていくのです。

一九九三年秋に二人は結婚します。四十八歳と四十九歳の初婚同士でした。

『時の雨』より **あなたの部屋に 処世術** 独身と結婚生活の違いをしみじみ噛みしめています。

車谷は、まさに命を懸けて小説を書く人です。人間の裏表を徹底して書く。魂の記録として血の滲むような作品を商品として売る事へ戸惑いもある。そのうえに、わたくし小説家として、モデルになった知人友人の恨みを一身に引き受け、心が静まるはずはありません。強迫神経症に悩まされていくこの時期を、高橋は伴走者として緻密に詩集『時の雨』に書きました。自分が書かずにいられなかったためですが、だからこそ他者に開かれた言葉となり、かつ生を乗り越えていくものとして読売文学賞を受賞しました。発症の様子が分かる詩を読みます。

夕日が畳に 青い刺 まだ かえらない

結婚前の詩とは、ずいぶん違います。でも、単に具体的なプライベートが書いてあるから、だけではありません。ここには、文学とは何か、という基本的な問題が控えています。

私ごとですが、島田陽子さんとよく電話で話しましたが、自分の底を掘っていくうちに、人間の底を流れる地下水脈にぶつかる。それを目指して詩を書くと言われました。わたくし的なものを懼れず書くことは、わたくし的なものを超えていくことです。山之口獭は、その典型ではないでしょうか。

二人は暮らすようになってから、それぞれの原稿がきたら読み合うようになります。約束したわけではなく、自然にそうしていたのですね。『時の雨』も、高橋がどうでしょうか、と差し出すと、「詩集後半はわれながら鬼気迫る。正確に理解していかけて驚いた」と車谷が言ったそうです。

こうして、高橋順子は鍛えられていったのでしよう。その成果が、東日本大震災後の『海へ』に結実します。前半は、高橋本来の、生活の中から繊細な感性が掬い取った作品が並びます。

『海へ』より 折り紙

初期のように比喩はないけれど、いつのまにか現実を離れますね。

後半に、大津波に遭った古里に寄せる詩が並びます。社会的現実としての海、記憶をつなぐ自分を作った海、それぞれをきっちり表現していきます。

浪・鳥・魚 海のことば 雨の魚

文字を波の形に並べて感情を表現しています。でも、これ一つだけ。

高橋順子のわたくし詩には、具体的事実の率直さだけではなく、絶妙なバランス感覚があります。自己憐憫に陥りそうところは、距離感のある眼差しで躲す。言葉は平明ですが、眼は平板ではないのです。言葉に奇想や重量をかけず、さらっと書かれているので、凝った現代詩に慣れた人は見過ごしやすいかもしれません。

詩は、繊細であえかなだけではない。また想像力を逞しくするだけでもない。生きる現実の重さの具体をきちんとみつめてこそ、突き上げる熱を表現できます、それは、車谷が掘り進めた方向でもありません。

二〇一五年五月、車谷は誤嚥による窒息で急逝しました。富士の裾野に文学者の霊園があります。

墓碑には、名前と代表作が彫り込まれるそうで、車谷のものには『赤目四十八瀧心中未遂』が記され、隣の高橋順子の碑にはすでに『海へ』が生きている人の赤字で彫られているそうです。

二〇一九年、十三番目の単行詩集が出版されました。車谷亡き後の日々を生きる、鎮魂詩集でもある『さくら さくらん』の中から読んでみましょう。詩集の前半には、ところどころ軽妙な味付けをしながら、生きていくさまざまな普段の時間がおかれています。

見たことのない野原 未知のわたし

理屈っぽさは少しもありません。どの詩も、具体的な事物が日々の実感に収斂していきます。

後半には亡くなった車谷に向かう詩が集めてあります。「愚かなうた」は十七篇の連作、率直に亡き連れ合いを偲びます。その七番目が、表題作です。

さくら さくらん さくらんぼ

音遊びに悲しみをまぎれさせてしまいました。省略が効果的なだけに、悲しみに錯乱する作者が見えませんか。

でも、この詩集は生きる希望に終わっています。

鈴が鳴っている

高橋順子の詩は、技巧を意識させず、言葉に重量を掛けず、詩を書く歓び、詩を読む喜びに満ちて、学ぶことが沢山あるとおもいます。有難うございました。